



北原白秋作詞「帰去来」歌碑／柳川市矢留本町 (やどみ) 白秋公園横の歌碑苑

歌碑のこころ

※詳しい解説は12頁に掲載しています

帰去来

山門は我が産土

雲騰る南風のまほら

飛ばまし今一度

もくじ

2 巻頭言 敦盛と忠度――

ウクライナ侵攻と『平家物語』……………山口 秀範

3 天地いつぱい⑧……………森川 徹

4 「偉人レポート」……………日下部晃志

6 教師生活を振り返って④……………矢永 誠二

7 『日本の偉人 100人+50人』
を読んで……………小柳 雄平

8 『日本の偉人 100人+50人』
をめぐる……………廣木 寧

10 TERA KOYAふおとればーと

11 “あちこちde寺子屋”のご案内

12 歌碑のこころ(24) 編集余録 余録の余録②⑤

敦盛と忠度——ウクライナ侵攻と『平家物語』

代表世話役 山口 秀範

無残な戦争

ロシアによるウクライナ侵略から四ヶ月を経過しましたが、終結への出口は全く見えません。古代から人間は数え切れないほどの戦争をしてきましたが、日々の攻防が全世界に同時進行で伝えられる事態は、未曾有の経験かもしれません。

それにしても情け容赦ない無差別な殺戮に加えて、画面には現れない虐殺や非人道的行為も頻発しているようで心塞がる毎日です。戦いにも自ずと最低限のルールがあるはずではないかと、違和感がずつとつきまといまいます。

宇露両国の起源キエフ大公国は九世紀後半から栄えましたが、やがてモンゴル帝国により崩壊、その後も度々の大戦を経て今日を迎えています。多民族のひしめく大陸で独立を守るためには敵を根絶やしに「民族浄化」する非情さも時には求められるのですが、そんなロシアともかつて戦った日本人は、そもそも生死を賭けた戦い方、敵への接し方において大きな差異を持っていたように思われます。

敦盛の最期

連日の戦闘報道の中で無性に『平家物語』が読みたくなりました。時代は随分遡りますが、我が先人の戦い方を見てみようというページを繰るうち、「一の谷の合戦」に目が留まりました。幼帝安德天皇を擁して都落ちした平家は、兵庫一の谷に陣を敷き源氏を迎え討とうとします。その時源義経が背後の険峻な鴨越から攻めて一気に勝負の帰趨を決したとされる名場面です。

ここに登場する平家の武将が平敦盛と平忠度です。敦盛は清盛の甥で弱冠十七歳の美少年でしたが海上の船に戻り遅れて源氏方の老将熊谷直実（くまがやのちかみ）に首を取られます。

腰に笛を差していたことから、この日の払暁戦場に流れていた妙なる調べはこの若武者のものであったと知れ、首

実検した義経始め涙を流して惜しましました。直実は我が子小二郎と同年の敦盛を討つたことで世を果敢無み、仏門に入って敵将を弔ったと伝えられます。

忠度の最期

忠度は清盛の異母弟で、武芸にも歌道にも熟達した大将軍でしたが、地方から寄せ集めの武者たちが早々に逃げて孤立したところを襲われて討死します。

簾（かき）矢を入れて背負う武具に結んだ短冊に次の歌があったことから素性が明らかになり、この時も敵味方涙を流さぬ人はなかった由です。

ゆきくれて 木のしたかげを 宿とせば 花やこよひの主ならまし

これより先、都落ちしていた平家軍から僅か七騎で密かに都へ戻った忠度は、和歌の師匠藤原俊成を訪ねます。そして自選の秀歌百余首を連ねた巻物を師に託し、やがて勅撰歌集が出される折には一首だけでも採用されんことを願うのです。

平家滅亡後に編まれた「千載集」の撰者となった俊成は世を憚って「読人知らず」とした上で次の歌を入れて忠度との約束を果たします。

さざなみや 志賀の都は あれにしを むかしながらの山ざくらかな

「青葉の笛」

敦盛と忠度を歌った小学唱歌をご存知でしょうか。「鉄道唱歌」をはじめ多くの歌を残した大和田建樹が明治三十九年に作詞した「青葉の笛」がそれです。

(一) 一の谷の軍破れ
討たれし平家の公達あはれ

(二)

晩寒き須磨の嵐に
聞こえしはこれか青葉の笛
更くる夜半に門を敲き
わが師に託せし言の葉あはれ
今はの際まで持ちし簾に
残れるは「花やこよひ」の歌

日露戦争の翌年、この歌が文部省唱歌に加えられた意義は大きいでしょう。国を挙げて戦い勝ち取った勝利の直後に、子供たちに八百年前の合戦を思い出させ、しかも敗者を悼む響きの漂う曲が与えられたのです。

明治人の気概

次は日露戦争中の明治天皇の御製です。国のため あたなす仇は くだくとも いつくしむべきことな忘れそ

さらに将兵たちの歌集「山桜集」にも、次のような歌が散見されます。

道すがら あだの屍に 野の花を 一もと折りて 手向けるかな

「あた」は敵兵のことです。今ウクライナを攻めるロシア兵は百年前も同様に凶暴を極めたでしょう。それを真正面から受けて戦った我が兵士に、そしてそれを支えた国民にも「仇をいつくしむ」心が湛えられていたとは驚嘆に値します。

時代を超えた「もののふ」の心情を偲ぶと共に、他国の侵略を許さぬ防衛力・抑止力の構築に向けて国民の声を上げることが、今こそ求められています。

○ 本号で二人が書いている『日本の偉人100人+50人』、発売以来上下巻との三冊セットで購入が目立つとのこと、有難く存じます。

年に一度アンケートを同封します。率直なご意見をお待ちします。応援団へのお申し込みもよろしくお願いいたします。